助成者	辻井　博	活動期間	2015年4月～2018年3月
所属機関	農村発展研究所	職　名	所長（京都大学名誉教授）

フィリピン世界遺産「イフガオの棚田」の稲作耕作放棄と棚田崩壊をなくすための現地社会活動への支援

【活動場所】フィリピン　ルソン島イフガオ州マヨヤオ

【事業目的】 アジア島嶼部や辺境部に広範囲に存在した棚田は、地形的立地的要因から経済効率が悪く、農村人口の減少・高齢化も伴い、耕作放棄と崩壊が急速に進んでいる。フィリピンの世界文化遺産である「イフガオの棚田」においても耕作放棄と棚田崩壊は顕著であり、棚田農家の経済的・文化的・社会的な安定を確保し、高齢化した稲作従事者が若い世代へ継承し、棚田崩壊を阻止することを目的に実施する。

ドジョウの幼生を投入された棚田

復田した棚田の連携生産状態

【活動内容】

①ドジョウと伝統米の連携生産支援：モデル生産農家の構築（養殖肥育農家4戸と肥育農家4戸）、モデル農家への資材投入（孵化タンク、幼生飼育タンク、孵化アミ、逃亡防止アミ等）、ドジョウ雌への排卵誘発注射の実施、ドジョウ稚魚購入による棚田投入（負担金を徴収し1万匹/戸を7戸の農家へ）、連携生産の広報など

②耕作放棄棚田（５アール）の復田：復田後は、伝統米とドジョウの連携生産開始

③日本の小型籾摺機導入の事前検査と現地デモの実施

【活動成果】

モデル農家による養殖からのドジョウと伝統米連携生産実装は、孵化したドジョウの幼生を稚魚まで育てることはできず失敗に終わった。復田した棚田は、マヨヤオの5大池や中心部などから見えやすい所にあり、伝統米とドジョウの連携生産が行われていることを広く伝えることができた。日本の小型籾殻機が果たす効果は実証できたが、日本から籾殻機を導入することは経済的側面を含めて断念した。事業は一部成果は認められたが、持続可能な形までは道半ばの状況にある。